

## 地域への関心や意識を高める

### 13 建築系学生をまちづくりに導く

日本建築学会関東支部では、実在の市街地を対象に、今後の「まち」をテーマに、建築・都市の専門家、地元暮らし子どもから内外の大人までが参加する提案競技、コンクールを毎年実施している。本プロジェクトでは、伝統的建造物と現代の建築物が混在する歴史的市街地で、統一感のある調和した町並みを提案し、その構想を地域の人々と共有する手法として、この提案競技を日本建築学会関東支部と連携して栃木市を課題地に企画・実施した。たてもものやまちのことをみんなで考え、未来を創造する機会にすることを目的に、以下の3部門において提案や作品を幅広く募集した。

- ①建築を学ぶ学生、実務者、建築に関わる市民を対象にした「建築・まちづくり提案の部」
- ②子どもから大人までを対象にした「写真コンクールの部」
- ③地元小・中学生を対象にした「絵画コンクールの部」

この内の建築・まちづくり提案の部は、「拠点のDNA—栃木市の歴史が築いた資産を活かしたあらたな拠点のすがた—」をテーマに開催した。栃木市には平成の大合併により周辺の5つの町が合併し、市域が拡大し人口も増大している。広い地域に分散して住んでいる人々の暮らしや仕事を支えるうえで、住いや職場から遠すぎないところで様々なサービスが得られることのありがたさや、時には人々が集まることで生まれる文化的な活動や社会的な活動の豊かさは、これからも価値を失うことはないのではないか。栃木市中心市街地の拠点としての歴史は地域の人々からすぐに忘れ去られるものではない。低利用あるいは未利用になっている土地や建物も元来は拠点としての都市資産であり、今はiPS細胞のように様々な機能に変わることができる新たな資産になっていると考えることもできる。そこで、栃木市の歴史および地域の特性を踏まえたうえで、これからの栃木市の中心市街地が担いうるあるいは担うべき拠点のあり方を考え、その拠点性を再構築するために対象地に点在する未利用・低利用の土地や建物などの歴史的な資産をどのように活かすのかを具体的に示し、新しいまちのすがたの提案を募った。ここで問う拠点性とは商業や行政等これまでの中心市街地に集積していた機能の再生に限らず、例えば医療、介護や子育て、若者の居場所やコミュニティ活動の場など様々な世代の生活に関する機能、ものづくりや食品加工、ソフトウェア開発などの産業に関する機能、芸術家やクリエイターが集まるエリアのような文化的な機能など多様な拠点性が考えられる。また、様々な都市機能をつなぎ人々の交流や回遊を生むしかけも、拠点性の向上に寄与するものと考えられる。建築を学ぶ学生らを中心に柔軟な発想であたらしい拠点を提案して、その時の栃木市の風景を描いてもらうことを期待した。

実施にあたり前年度から学会担当者、学識者、市担当者らと協議を進め、提案作品の応募にあたり夏休み期間を利用して現地説明会とワークショップ(写真1)を開催した。ワークショップでは、まち歩きの際にまちの魅力や課題を撮影するためのタブレット端末をグループごとに貸与し、その端末では撮影した画像と撮影地点が地図上で確認できるようになっている。さらに、グループ相互で撮影した写真と位置情報が共有できるシステムを構築していることで、互いのグループの思考を共有することに役立てた。学識者らによる厳正な審査によって一次審査を通過した作品に対する二次審査を公開形式で行い、優秀作品を11月の市民文化祭期間に合せて一般

市民にも公開する形で表彰式と発表会(写真2)を行った。公開二次審査や表彰式については、図1のチラシを各所で配布し告知した。作品を住民らと共有する場を設け、それを町の将来像として地区に関する人々に例示することで、学生たちにとっては自信ややる気に繋がり、地域のステークホルダーにとっては地域固有の価値に対する自覚と誇りを醸成する相乗効果が得られたと考える。実施要項や結果等の詳細については、日本建築学会関東支部ホームページ(<http://kanto.aij.or.jp/proposalcompetition>)を参照されたい。作品の一例を図2に示す。



写真1 ワークショップの様子

図1 公開審査と表彰式の告知



写真2 作品発表会の様子



(a) えんかつのある風景 えんかつからの風景  
-原風景を活かした拠点-



(b) 2+α in 1

図2 作品の一例